



【当時の鶴高新聞】

程経った頃、会社が吸収合併される話が見え隠れした時にちよつと脱出して、ひとりで起業したんです。

—その時に一番起業に向かわせたものは何でしょうか

それは当時のお客様ですね。「辞めちゃうの?」と言われるとやはり引きずるものがありました。せうかくお客様や知り合いもできたのに、「ごう」という信頼関係がなくなってしまうのはもったいないなど。

—起業する際に苦労した点をお聞かせ下さい

資金繰りや信用がないのは苦労しました。ただ、それは一般的に起業する誰もが経験することだからと覚悟の上でやっていたのですが、なくなつたホチキスの芯やクリップ

も全て自分で買いに行ったり、アルバイトの電話番号が急になくなって困ったり、今まであって当たり前だったものがないと、こんなにも手間がかかるとかと思いましたがね。

—鶴高時代で印象的な思い出をお聞かせ下さい

新聞部でしたから、文化祭のパンフレットの編集と鶴高新聞の発行です。

鶴高新聞というタブロイドの四ページものの新聞を年に四回くらい発行してました。一面に学校のニュースを、二・三面が時期ごとの特集記事か何かで、最後の面が皆から集めた詩とかの文芸欄だったと思います。吉祥寺にある印刷会社で校正をした思い出があります。

私が部長だったので顧問の先生

と相談のために職員室で話すということがありましたが、活動はほとんど生徒に任せてくれていて、原稿の最終的なチェックを見てもうつくらしいでした。それもほとんどノーチェックでしたが(笑)

—現役当時の鶴高はどのような様子でしたか

良い意味で生徒が点でばらばら。本当に真面目に勉強する人もいるし、他校の女子と交流を深めるのに情熱を燃やしている人とか、色々なタイプの人達がいたっていうのは非常に面白い時でした。団塊の世代ですから生徒数が多いんです。一学年九五〇人、クラスに六十人が六十五人くらいいたと思います。

—この場を通して同窓生へ伝えた